



UNIC Tokyo Dateline UN

July / August 2002 Vol.33

国際連合広報センター

国連ポスター展

UN ギャラリーにて
好評開催中



国連ポスター展のオープニング・セレモニーに参加した UNFPA 親善大使の有森裕子さん【写真左】は、平山都夫氏が描いた UNESCO ポスター「アンコールワットを救おう」を見つめ、「ここは毎年行われるハーフマラソンのスタートラインなので、親しみを覚えます」と語った

東京・渋谷の UN ギャラリーでは、8月1日、「国連ポスター展～よりよい世界のために～」のオープニング・セレモニーが行われました。国連ポスター展は、2000年のミレニアム総会を記念して同年12月にニューヨークの国連本部で初公開されたもので、その後世界8カ国を巡回し、今年5月からは日本各地での展示が続いています。

当日は気温35度を超える猛暑にもかかわらず、大勢の参加者にお集まりいただき、UN ギャラリーでの展示のスタートを祝いました。オープニング・セレモニーでは、高島肇久国連広報センター所長のあいさつに引き続き、今年1月から国連人口基金 (UNFPA) の親善大使を務めるマラソン・ランナーの有森裕子さん、外務省国際社会協力部長の高橋恒一氏、フランソワ・ダルタニアン国連大学事務局長がメッセージを述べ、リボンカットを行いました。

日頃から絵画やポスターに関心が強いという有森さん

は、「ポスターの美しさが人に訴えかけるものは予想以上の力を持っている」と語り、一人でも多くの方に国連ポスター展へ足を運んでほしいと述べました。

UN ギャラリーでは、90枚を超える個性豊かなポスターを通じ、幅広い国連の活動を一度に知ることができます。展示は9月20日まで開催されています (国連ポスター展に関する記事は本誌6-7ページに続きます)。

INSIDE

「国際エコツーリズム年」記念シンポジウムの報告	2-3
国連世界防災白書発表	4-5
UN ギャラリー「国連ポスター展」オープニング・セレモニーから	6-7
ポリオ根絶に活躍するアンゴラの子どもたち	8-9
UNAIDS : アフリカでのエイズに関するデータを報告	10
第5回国連軍縮京都会議から	11

<http://www.unic.or.jp>

地球を体験し、 地球を守る新しい旅



「国際エコツーリズム年」記念シンポジウムを開催

国際連合広報センターと財団法人五井平和財団は7月29日（月）、UNハウスのウ・タント国際会議場で「地球を体験し、地球を守る新しい旅」のテーマのもと、「国際エコツーリズム年」記念シンポジウムを開催しました。同シンポジウムには、日本でのエコツーリズム推進に中心的役割を果たしている日本エコツーリズム協会が共催団体として参加し、UNギャラリーで同時開催されたエコツーリズム展への出展を協会のメンバー団体や在外公館に呼びかけました。

約300名の参加者が集まったシンポジウム会場で、まず、**国連広報センターの高島肇久所長**が挨拶を行い、国連がエコツーリズムを国際年として推進すべきテーマとした経緯とその現状を説明しました。続いて、**五井平和財団理事長の西園寺裕夫氏**は、「民族、宗教、政治を超えた完全中立な世界平和活動と『生命憲章』を基軸として、教育、科学、文化、芸術など様々な分野と協力し合って、人々の心と英知を平和とい

う一点に結集するためのネットワークづくり」を目指している財団の活動を披露しました。その意味でも今回、国連と共にエコツーリズムに関するシンポジウムを主催することになったことを意義深いものだと述べました。



日本エコツーリズム協会
会長 愛知和男氏

基調講演は、**日本エコツーリズム協会会長の愛知和男氏**が「国際エコツーリズム年の取り組み～ワールド・エコツーリズム・サミット報告～」のテーマのもと、本年5月に

カナダのケベック市で開催された国際エコツーリズム年最大のイベントである「ワールド・エコツーリズム・サミット」【主催：UNEP（国連環境計画）、WTO（世界観光機関）、カナダ政府、ケベック市】の報告を行いました。ただし、日本からの参加者には経済産業省が含まれておらず、「日本では観光が未だに産業として認知されていない」ことを指摘しました。「ツーリズムで感じたことが日常に還元され、日常生活がそれによって修正されるきっかけとなること、また、子

どもたちが新しく何かをつかんでその後の指針にできること、そして、先輩が子弟の教育に生かすこと、これらがエコツーリズムの意義です」と述べて、愛知氏は講演をしめくりました。

海洋生物学者として知られる米国カンザス州出身の**ジャック・T・モイヤー氏**は、「環境教育と海洋型エコツアー」をテーマに、流暢な日本語で事例発表を行いました。モイヤー氏はもともと研究者として、三宅島、御蔵島、小笠原群島の野鳥、海洋哺乳類、さんご礁の研究を行っていましたが、最近では「自然を研究することよりも、その大切さを多くの人々に知ってもらうことの方が重要」だと考え、海洋自然教育やエコツアーの実践に力を入れています。「イルカは繁殖のために御蔵島を訪れるのであって、人間と泳いだり遊んだりするためにそこにいるのではありません。今、イルカとの遊泳があまりにも



ジャック・T・モイヤー氏

人気となり、人間が邪魔になっています」と警告を發しました。外部からの観光客は自然、動物、そして地元住民のことをもっと考慮しなくてはならず、また、自然保護のた



(上) 300名近い参加者を得て、シンポジウムは大いに盛り上がりを見せた(2002年7月29日、UNハウス内のウ・タント国際会議場にて)



(上) ジャック・T・モイヤー氏は長年携わっている海洋自然教育やエコツアーの様子をスライドを交えて発表した



(右) シンポジウム終了後、さまざまなエコツアーを紹介した資料やパンフレットに手を伸ばす参加者たち

「国際エコツーリズム年」 記念シンポジウムの会場から

写真提供・五井平和財団

めには各々の現場でその地に適した細かなルール作りをする必要がある、と強調しました。

国内のエコツアーを具体的にご説明されたのは下村彰男先生(東京大学大学院教授 森林科学専攻)でした。「森林の保全管理とエコツーリズム～教育旅行への試み」というテーマで、日本において人と自然との新たな共生の仕組みを構築する必要性を説きました。具体的には「青少年による未来の森づくり」構想により、子どもたちが「森林と人とのつながり」をテーマに体験学習する機会を提供し、森林や林業への理解を深めることです。また、下村氏は「森林を抱える地域の活性を目的としてエコツーリズムが実施されなければならない」と述べ、この点で地域住民や専門家によ



東京大学大学院教授
下村彰男氏

した。

海外のエコツーリズムの事例発表は、山下晋司先生(東京大学大学院教授 文化人類学専攻)が行いました。マレーシア・ボルネオ島のサバ州のケースを中心に上げ、エコツアーが地球環境と地域社会を理解し、グローバルでかつローカルな問題の解決につながっていく

るガイドが重要になってくると指摘しました。エコツーリズムに関しては、「各地域が対応できる参加者人数などの規模は限られており、受け入れプログラムや体制作りには時間がかかるとも特徴です」と述べ



東京大学大学院教授
山下晋司氏

可能性について考察しました。エコツーリズムが「欧米のミドル・クラスが持つ社会・経済的な価値観である」という説があるように、エコツーリズムの実践の中で様々なアイロニー(皮肉)も生じています。例えば、エコツアーが盛んになればなるほど、その地の自然は破壊されることが確認されています。

最後の質疑応答では、教育関係者、学生、観光業やエコツーリズムを実践している方々から、エコツアーのもたらす教育効果や地域貢献に

関して活発に質問が出ました。シンポジウム終了後、多くの参加者は同時開催されたUNギャラリーでのエコツーリズム展をじっくりと見学していらっしやいました。

世界防災白書

～より安全な世界を実現する防災の道筋を国連が明らかに～

国連は8月9日、世界防災白書を発行しました。同書は、地震で建物はぐらついても経済はぐらつかない、サイクロンでドラマは生まれても悲劇は生まれない、また洪水が風景を水浸しにしても、希望を押し流してしまわない、そのような世界の実現を呼びかけています。

400ページにわたる「世界防災白書－Living with Risk」は、火山の噴火、森林・原野火災、ハリケーン、津波、地すべり、竜巻といった自然の力、また事故災害や環境悪化に起因する災害を通じて、専門家やコミュニティが学んだ教訓の集大成です。私たちが直面するこの課題はかなり手ごわいものです。というのも、過去10年のあいだに発生した4,777回の自然災害で、88万人以上の命が奪われ、18億8千万人の住居、健康、生活に悪影響を及ぼしただけでなく、全世界で6,850億ドルもの経済的損失をもたらしたからです。

「現代の災害はしばしば人間活動により引き起こされているか、あるいは人間活動が災害の深刻さを助長させています」。コフィー・アナン国連事務総長は、白書の発行に寄せてこう述べています。「最も憂慮すべきは、人間が地球上の自然バランスを変え、この地球を居住可能な惑星にしている大気、海洋、極地の氷雪、森林、その他の自然の恵みに対してかつてない干渉をしていることです。同時に、我々自身をも潜在的に危険



記者会見にのぞむサルパノ・プリセーニョ ISDR 事務局長（左）と国連人道問題担当事務次長の大島賢三氏（2002年8月9日、内閣府にて）



世界防災白書
－Living with Risk－

な状態に置いているのです。歴史上、人類がこれほど地震多発地域周辺の都市に集中したことはありません。貧困と人口の過密化でかつてないほどの人々が氾濫原や地すべりの発生しやすい地域での生活を余儀なくされているのです」

白書では、1999年に終了した、国連「国際防災の10年」で得られた教訓を検証します。また、数世紀にわたって世界各地で風水害、森林・原野火災、干ばつなどからコミュニティを守ってきた伝統的な方法に触れ、さらに、都市の爆発的成長がもたら

す新たな脅威について検証しています。また、政治による問題解決の努力や円滑な情報伝達が人命を救い、開発途上国に希望をもたらし始めている点についても言及しています。

「地震で死者を出さないようにするのは不可能ではない」、と国連人道問題担当事務次長の大島賢三氏は言います。「人は地震で亡くなるのではなく、危険な建物が原因で亡くなるのだ。自然の力はすさまじい。しかし、危険を予見することは可能だ。いわゆる『自然災害』でおびたしい数の犠牲者が出たのは、悲しいかな、そうした犠牲者や地域の指導者たちが、災害の危険性を理解せず、悲劇を未然に防ぐために必要な手段をとらなかったからなのだ。今回の白書は、安全な地球を実現するための旅の始まりと考えていただきたい」

白書では、経済発展と不安定な環境との複雑な関連について検証しています。たとえば、気まぐれな自然は、ハリケーンや地震という形で猛威をふるい、脆弱な経済に揺さぶりをかけ、最貧層の人たちの乏しい資産をも奪ってしまいます。また、規模の小さな、それほど激甚でない災害が、マスコミの取材陣や救援隊が去ったあとも、被災地にじわじわと影響を及ぼし続けるのです。白書は、リスク評価、予警報体制、公衆の安全といった簡単な手段が、将来に向けての地域開発計画に必ず盛り込まれるべきだ、と提言しています。



【写真左】
地滑りで崩壊した山道

【写真右】
地震でひび割れた橋脚

(写真提供・アジア防災センター)



「防災について考える場合、一筋縄ではいかない問題がいくつもある。たとえば、活動や投資は、コミュニティの緊急の必要に応えるものでなければならない反面、災害によって生じるリスクを軽減するものでなければならないということだ。開発が死活問題である諸国にとって、とりわけこの点は重要である」。2000年に活動を開始し、より安全な世界を築き上げるための新しい処方箋をまとめた国連国際防災戦略事務局 (ISDR) の事務局長である、サルバーノ・ブリセーニョ (Sálvano Briceño) 氏は次のように話しています。「たとえば、連絡がつきにくい遠隔地に早期警報システムを設置すれば、事故や急患といった『通常の』緊急事態に通信手段として利用することもできる。教訓から学んだ人々が、災害に強い安全な社会を創るのだ」

一例をあげると、1991年、サイクロンとそれに伴う高潮に襲われたバングラディッシュでは、13万9千人以上の死者が出ました。その後、気象関係者、政府の計画立案者、一般のボランティアが、最も危険な地域にいる人々に警告を発し、最寄りの避難シェルターに避難させるための迅速、単純、かつ安上がりな方法を考え出しました。相変らずベンガル湾

は、年中行事のように高潮とサイクロンに見舞われていますが、今では人々が万全の備えを怠らないため、犠牲者の数は激減しています。しかしながら、ある地域で得られた教訓が、別の地域で生かされるとは限りません。1998年、ハリケーンミッチは、ホンジュラスとニカラグアの社会基盤の70%を破壊しました。翌年には、100年に一度の大型サイクロンがインドのオリッサ州を襲い、被災者数はミッチの時の10倍に達し、一晩にして1万8千もの村が全滅したのです。

「この白書は、これまでとは違う未来を提言している。防災そして脆弱性の軽減こそ、最善の策なのだ。少ない費用で、犠牲者の数は減り、生活を守り、明るい未来を築くことができる。災害リスクの軽減は、持続可能な開発の一部なのだ」

「世界防災白書－Living with Risk」は、よりよい世界への道筋を提示しています。そのような世界では、コミュニティが自然の脅威と対峙して存在するのではなく、環境に順応して共生しています。政治家、計画立案者、土木技術者、銀行業 / 保険業者、地質学者、気象学者、社会福祉の専門家、医師、緊急対応専門家

による経験に基づいて本白書は作成されています。また、人間活動によって引き起こされる地球規模での温暖化がもたらす新たな問題についても述べ、他方、アンデス山脈のインカ帝国、ベトナム、上海といった様々なコミュニティで数世紀前から実践されている、干ばつや風水害に対する単純だが効果的な防災の手法についても取り上げています。

「我々は、もう一度、自然と共に生きるすべを学ぶ必要がある」、とブリセーニョ氏は言います。「高度な科学技術を駆使した方法を考えようとか、昔の単純な世界に戻ろうと言っているのではない。高度な科学技術は、多くの国では経済事情から適用が困難だろうし、素朴な昔の世界に戻ることなどは、夢物語にすぎないからだ。無理なことをやろうと言っているのではない。災害についてより理解を深め、なぜ我々の社会が脆弱なのか、どういう災害リスクがあるのかを知ったうえで、慎重に災害に備え、防災に努めようと提案しているにすぎない」

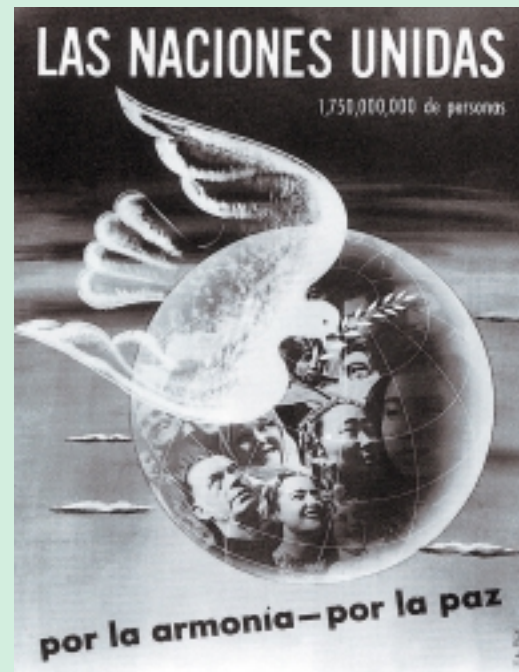
世界防災白書の全文は
<http://www.unisdr.org>
で読むことができます



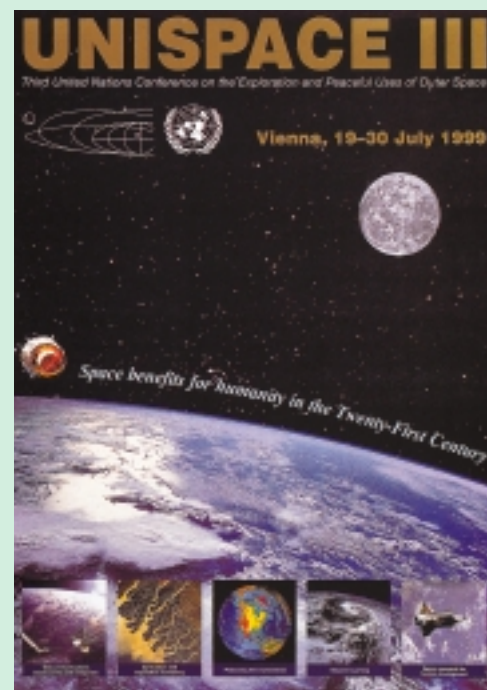
1



2



3



4



5

- 1 「難民援助は平和に貢献」 イラスト：ハンス・エルニ
国連難民高等弁務官事務所〈UNHCR〉ポスター 1986年
- 2 「世界人権宣言」採択記念 画：ホアン・ミロ（ユネスコ・ポスター 1978年）
- 3 「国際連合」（おそらく最初の国連ポスター 1946年）
- 4 「21世紀の人類に宇宙がもたらす恩恵」
（宇宙空間の探査と平和利用に関する第3回国連会議用ポスター 1999年）
- 5 「スーパーマンとワンダー・ウーマン」アート・ディレクション：ボニー・パーリン
ホフ（ユニセフの地雷廃絶キャンペーン・ポスター 1998年）

ポスターは国連の歴史を体現

以下はUNギャラリーでの「国連ポスター展」開催に際し、ジョセフ・バーナード・リード国連事務次長兼渉外担当特別代表から届いた祝辞です

現在、世界を巡回し、成功を収めている「国連ポスター展」を日本で開催する運びになりましたことに対し、国連事務総長は大変感謝しております。

国連は、その創設当初から、人の注意や目を引くようなポスターで国連の様々な面を強調しており、ポスター展を通して、私たちはこの財産を守っていく努力をしてきました。

一旦イベントや重要な出来事が過ぎてしまうと忘れ去られるように、ポスターは一般の方々にとっては短い命しかありません。しかし、ポスター展の実行に傾けられた努力はどんなに時間が経っても価値を失いません。非常に多くの国連のポスターは、国連職員を含め、才能ある世界的に有名な芸術家やデザイナーの作品です。国連機関によって作られた最高のポスター作品の代表的なものは、このポスター展でも展示されています。その多くは1990年代のもですが、1947年と1948年に開かれた国際コンテストで大賞を受賞したポスターの複製版も含まれています。最近のものであろうと、半世紀前のものであろうと、ポスターが描写しているアイデアと価値は時代を超越しています。これらを通して、未来を見据えながら、私たちは人類が置かれている状況を新鮮な視点で見ることができるのです。

しかし、このポスター展は歴史的な意味合いを持つだけではありません。ポスター展は過去一世紀の間、国際社会の関心事や優先事項を目に見える形にしてきました。また、ポスターには芸術的価値もあります。多くの著名なアーティストが国連ファミリーのポスター事業に協力しており、それは世界規模の目標や理念を求めていくのに、最も効果的な方法です。

例えば、ピカソの平和のハトは1946年に初の国連ポスターを飾る名誉を与えられ、1978年にはホアン・ミロがユネスコ世界人権宣言の記念のためにその才能を披露しました。また、ロベルト・ローゼンバーグの幾つかの作品を国連ポスターの中に見ることができます。その他にジャン・ミッシェル・フォロンや写真家のセバスチャン・サルガドの作品も含まれています。このような著名な芸術家以外に、ポスター展は伝統的な芸術も採用し、また、国際連盟時代である1938年のポスターも展示に含まれています。

このように「国連ポスター展～より良い世界のために～」は、簡略化されていますが、国連の歴史を体現したもののなのです。

国連ポスター展

～よりよい世界のために～

ポリオ根絶に活躍 アンゴラのガール/ボーイスカウト

ユニセフ（国連児童基金）が中心になって行うポリオ撲滅キャンペーンの主役は、10代の青少年たち。乳幼児を連れて市場に買い物に来る母親たちに、予防接種の必要性を試行錯誤しながら熱く訴えています。アンゴラでは2005年までにポリオを根絶するという目標があり、国連をはじめ国際援助機関やNGOなどの協力を得ながら地道な努力が行われています。

「こんにちは、私はガールスカウトのイサです」と少女は微笑みながら乳児を抱える母親に近づきました。母の頭には、市場での買い物に使う青いプラスチックのたらいがのっています。「ポリオのことを知っていますか？ 今週末、アンゴラの5歳未満の子供は、無料でポリオの予防接種を受けられるんですよ」



幼い子どもを持つ母親にポリオの予防接種を呼びかけるガール・スカウト

母親は不審そうな表情で少女を見ました。「あなたは誰なの？」「私はガールスカウトのイサです。あなたの赤ちゃんが健康に育つ方法を教えたいのです」。今日は2002年6月22日、土曜日の朝。ルアンダにあるサンパウロ市場は落ち着いて会話できる状態ではありません。暑く、ホコリが立つなかで、大勢の人々が往来します。買物客は、細長い列に沿って地べたに座って物を売る女性たちの間を縫うようにして移動し、物物交換や商売が騒々しさのなかで行われています。野菜、鶏肉、干し魚、古着、石鹸、薪、包丁、ランプ、時計、お酒、この市場では何でも手に入ります。

母親はたらいを地面に下ろし、座りこんで、子どもを抱き寄せました。背後から、興味を持った他の女性たちもしゃがんでいるイサのまわりに集まって来ました。「ポリオはあなたの子どもの体を不自由にします」とイサは根気よく説明しました。「でも明日この子がワクチンを2滴口に含んで、再び7月と

8月にそれを繰り返せば、一生ポリオから身を守ることができます」

「この病気は体を不具にするの？ そんな病気、娘にかかってほしくないわ」と、日差し

に目を細めながら母親は言いました。「いくらかかるの？」

「無料です。今週末、私たちは皆さんの自宅で予防接種を行います。明日の朝、子どもと一緒に家にいれば、ワクチン担当の人がやって来て、ポリオを予防するワクチンを配ってくれます」

「本当に無料なの？ 世の中にタダなものはないのよ」

「もちろんです、お母さん。明日の朝、ワクチンを持って来る人が来るまで家で待っていて下さい。絶対、無料だと約束しますから」

「わかったわ。じゃあ明日、待っています。知らせてくれてありがとう」と言いながら母親は立ち上がり、娘を背負ってたらいを頭にのせました。「これから家族のために食物を買わなくちゃ」

イサは18歳。社会啓発活動を、12歳のカルロス、15歳のファティマ、18歳のホアンとともにサンパウロで行っています。彼らは、7千人もいるアンゴラのボーイスカウトとガールスカウトのメンバー。6月21日から23日まで、ア

ンゴラの保健省が主催する「国民免疫の日」に対するアンゴラ人の意識を高めるためボランティアとして働いているのです。今週末300万人もの子どもが、UNICEF（国連児童基金）やその他の協力団体の助けを得て予防接種を受けます。野生株のポリオウイルスが生存する国はアンゴラを含めて世界に8カ国あり、ヨーロッパではちょうど前日の20日に、ポリオ完全撲滅が確認されました。

「明日もまた、歩いて多くの人に話をしに行きます」とイサは言いました。「みんなに予防接種の大切さを伝えて、アンゴラからポリオをなくすことが大切です。私がこの活動に参加して3年が経ち、より多くの人たちがこのポリオ根絶運動を知るようになりました。ラジオ、テレビ、新聞もポリオのことを伝えるようになりました。それでもまだ、親たちの中には子どものポリオ予防に昔ながらの薬が効くと考える人もいます。ですから、市場で一人ひとりに、またグループに語りかけることが必要です。私たちは親たちに『ポリオの基礎知識とその予防』というパンフレットも配っています。たいてい私たちが去った後、特に市場にいる女性たちはすぐに反応するようです。時には、字の読めない女性が字の読める女性のところへ行って、パンフレットの内容を説明してもらったりしているんです」

カルロス(12歳)は、この4人のガール/ボーイスカウトのメンバーでは最年少です。しかし、彼も他のメンバーと同

様、ユニセフが支援するスカウトの特別な訓練を受け、ポリオに関する知識やその啓発について学んでいます。カルロス一つひとつの会話を説得力のあるものにしたいと考えています。古く、くすんだ緑色の傘の下で休む女性の横にしゃがみ、話を始めました。彼女は辛抱強く熱心に耳を傾け、カルロスが話し終わると、微笑んで彼の頬に手を当てながら「あなたっていい子ね」と言いました。「でも、私に教えてくれなくても大丈夫。…市場に来る前に私の子どもはもう予防接種を受けたんだもの。さあ、他のお母さんたちのところへ行ってお母さんに教えてあげなさい。…きっと彼女たちはまだ知らないから」

アンゴラでは2002年4月、何年ぶりかで停戦協定が結ばれ、その後、以前は内戦のために入れなかった地域においてもポリオ予防の啓発キャンペーンが可能となりました。今週末、ワクチンを配布する人たちやガール／ボーイスカウトのメンバーを含む、3万人のボランティアが参加して、アンゴラ各地の数十万人という子どもたちへ予防接種を行うことになっています。多くの子どもたちは長く続いた内戦のために、予防接種を受けることができませんでした。そしてアンゴラ内にいる全ての5歳未満の子どもたちへの予防接種が可能となった今、ポリオ根絶運動は子どもたち一人ひとりへ薬が行き渡るように「ドアからドアへ」という方法になりました。

カルロスは微笑んで立ち上がり、近くで困っているイサのところへ近づいていきました。「ワクチンなんてとんでもない。古くからある薬を私の赤ちゃんにはあげるんだから。それで充分です」と女性はイサに言っています。その母親の背中には乳児がおぶわっていました。それでもイサは微笑み続け、諦めない決めていました。「でもお母さん、…この子をポリオから守るには予防接種が必要で、この子はその薬で強くなるんですよ」

「いえ、いえ、昔ながらの薬のほうがいい」

ちょうどその時、松葉杖をついた若い男性が側を通りました。彼の左腕は弱っていて、宙にぶら下がっているようでした。

「見てごらん。あの人は昔ながらの薬を飲まなかったんだよ」。男性が通り過ぎると、その女性はつぶやきました。再び、何人かの女性がイサがその女性を説得するのを助けに来ました。彼女は微笑みながら、ワクチンが子どもに害を及ぼすのではなく、助けるものだという事を説明しました。

「私の赤ちゃんは今朝、この薬を飲んだのよ」。集まっていた女性の一人が言うと、

「ねえ、私たちはあなたの赤ちゃんを助けようとしているのよ」と、もう一人の女の人が言いました。

「ガールスカウトは正しいことをしているのよ。ワクチンはきっと効くわ」と3人目の女性が付け加えました。

ところが説得の後、その女性もつと意地を張ってしまいました。

そばで話を聞いていたグループ最年少のカルロスがこの時、話の輪に加わりました。カルロスはその女性のひじに触れました。女性は厳しい表情でカルロスを見下ろしています。「お母さん」とカルロスはその女性の目を見て、親しげに、それでもしっかりとした口調で言いました。

「昔ながらの薬とワクチンと、両方を赤ちゃんにあげたらどうですか。どちらの薬も無駄にはなりません」

みんな黙ってカルロスを見、カルロスは女性の目をじっと見つめました。彼は眉を少し上げ、肩をすぼめました。女性はしばらくカルロスから目を放さず、しばらく彼女の反応を黙って待っている周りの人々を見渡しました。

それから女性は微笑み、自慢気になりました。

「昔ながらの薬とワクチンと、どちら

も子どもに飲ませることを決心したわ。そうすればこの子はもっと強くなるでしょうよ」

彼女は背を向け人混みの中を歩いて行きました。彼女の尊厳は損なわれずにすんだのでした。

「カルロス、よくやったわ。」

イサはカルロスに抱きつきながら言いました。

「次に誰かがまた昔ながらの薬しかいらないと言った時のために、今日カルロスが言ったことを覚えておくわ」

「ありがとう」とカルロスは言いました。「イサ、ぼくも君から沢山の事を学ばせてもらったよ。さあ、歩きながら話そう」

ユニセフは、ガールスカウトやボーイスカウトの社会啓発活動の訓練を支援するだけではありません。また1997年以来、アンゴラでポリオ予防の経口ワクチンを配っている唯一の機関です。今年、1,700万ものワクチンをアンゴラの保健省に提供しました。ユニセフはまた、アンゴラ保健省に対して「国民免疫の日」のためのキャンペーンの質の向上、その普及評価や、小規模な企画など様々な技術提供を行って来ました。ユニセフは、主にラジオを通じて全国的にポリオ根絶のため



ボーイ・スカウトの話に聞き入る母親

の社会活動を推進しています。

ポリオの「国民免疫の日」に協力している団体は、WHO (世界保健機構)、ロータリー国際財団、USAID、ACDC-Atlanta and CORE などがあります。英国、日本、米国、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、カナダ、ポルトガル、オランダ、そして企業が財政的な支援を行っています。アンゴラで2002年末までにポリオの感染を防ぎ、さらに2005年までにポリオ根絶を達成するための素晴らしい努力をこのように多くの人々が協力しながら行っているのです。

UNAIDS 報告： アフリカでのエイズの破壊的 影響を物語るデータを発表

免疫不全症例が初めて報告されてから、エイズは人類がこれまでに経験した病気でもっとも破壊的なものとなっています。その後、世界で6,000万人を超える人がエイズの原因となる HIV（ヒト免疫不全ウイルス）に感染しました。現在、エイズは世界全体で見ると死亡原因の第4位となっていますが、サハラ以南のアフリカ諸国では第1位です。エイズは、多くのアフリカの国々では国家の安全保障を揺るがすほど大きな影響を及ぼしているのです。



国連 HIV / エイズ 合同計画 (UNAIDS) は6月、アフリカの社会と経済に対するエイズのこれまでに例を見ない破壊的影響に関するデータを発表しました。現在、アフリカの HIV 感染者は2,800万人を超え、国によっては、成人人口の30%以上が感染者となっています。

UNAIDS の事務局長、ピーター・ピオット博士は「HIV / エイズの破壊的影響は、アフリカにおける数十年間の発展を逆行させている」と述べています。「教員から兵士、さらには農民に至るまで、アフリカ社会の隅々までエイズの攻撃にさらされています」。

HIV / エイズは、サハラ以南アフリカのすでに脆弱な市場において、経済を急速に不安定にしています。サハラ以南アフリカの経済成長率はすでに、エイズによって4%も低下しました。もっとも影響の大きい国々では、労働生産性が50%も減少しています。ザンビアでは、経営部門の死者のほぼ3分の2が、エイズを死因としています。被害が深刻な国々では、2020年までに、エイズによって労働人口の25%が命を

失う恐れがあります。

農村部では、700万人の農民がエイズで死亡していることにより、農業生産が深刻な打撃を受けています。ブルキナファソでは、農村部の5世帯に1世帯が、エイズによってその農作業を縮小したか、さらにはその農地を放棄したと見られています。農作業に携わることができる人数が少なくなる中で、農家は、農地面積の縮小や、労働集約性の低い自給作物への転換を余儀なくされていますが、これらの作物は、栄養価も市場価格も低いことが多くなっています。

同時に、被害が深刻な多くのアフリカ諸国では、効果的な開発のための必須条件である国家の安全保障が、エイズによって根底から揺らいでいます。これらの国々の国防省によれば、兵士の HIV 感染率は平均で20～40%、HIV / エイズの出現から10年以上を経過している国々では50～60%にも上っています。米国の国家情報会議 (National Intelligence Council) によれば、エイズの軍事面での代価は、アフリカでも近代化が進んだ軍隊、特に士官クラスで、もっとも高いものと見られています。士官や重要ポストの職員が病気になれば、これら軍隊の戦闘準備体制と戦闘能力は低下し、経済・社会成長に必要な安定

が脅かされかねません。

予算が縮小し、公務員がエイズで命を失う中で、政府の国民に対する奉仕能力も失われます。例えば、ボツワナでは、政府の歳入がエイズにより、2010年までに20%減少するものと見られます。ケニアでは、警察官の死者のうち、エイズを死因とするものが4人に3人に上っています。保健、福祉および司法など、不可欠なサービスが揺らぐ中で、もっとも貧しく脆弱な世帯は、最悪の被害を受けているのです。

「アフリカのエイズの状況は厳しいが、希望はある」とピオット博士は述べています。「十分な資金を備えた政府支援による全国的エイズ・プログラムによって、その蔓延を後退させることに成功した国があります。このような努力を広め、サハラ以南のアフリカのあらゆる人々に手を差し伸べなければなりません。エイズ対策への投資は、人命の救助、コミュニティの連帯維持、および、経済の保全という点で、数千倍にも及ぶ収益をもたらすことでしょう」。

UNAIDS ホームページ
<http://www.unaids.org/>

第5回国連軍縮京都会議

～国際安全保障と軍縮に対するテロリズムの挑戦～
 ～世界および地域への影響～

◇以下は国連アジア太平洋平和軍縮センター所長を務める
 いしぐりつとむ
 石栗勉氏からの寄稿です。

去る8月7日より9日まで、国立京都国際会館にて「国際安全保障と軍縮に対するテロリズムの挑戦—世界及び地域への影響」と題する第5回国連軍縮京都会議が開催された（国連アジア太平洋平和軍縮センター主催、外務省及び京都市後援）。基調講演は前国連難民高等弁務官の緒方貞子氏にお願いした。

昨年9月11日の米国同時多発テロ攻撃は、冷戦後培われてきた地域、世界の安全保障秩序に対する重大な挑戦をもたらし、更には、従来の「国家」対「国家」から「国家」対「目に見えない無国籍集団」という全く新たな次元の問題を導入した。国連は、早い段階で「テロリズムは国際の平和と安全に対する脅威」と位置づけ、国際社会の対テロ協力を求めてきた。

会議では、「テロリズムと安全保障」、「核兵器など大量破壊兵器のテロリストによる使用防止」、「既存の対テロ条約・協定の遵守」、「各地域における対テロ対策」、「小型武器問題」、「情報戦争」、「国連及び専門機関の対応」、「ミレニアム宣言実施」などを取り上げ、テロリズムの問題を包括的に検討した。

議論の過程において、次のような興味ある見解が示された。

- 1) アメリカの単独行動主義の是非
- 2) テロ攻撃後の安全保障は、従来の「相互確証破壊」の理念から「協力的脅威削減」に移行すべきだ。そのためには、不拡散条約体制強化、戦略軍備削減継続、宇宙戦争回避が重要
- 3) 核テロの危機として、テロリストによる核兵器やプ



上) 会場となった国立京都国際会館
 左) 基調講演を行った前国連難民高等弁務官の緒方貞子氏

ルトニウムや高濃縮ウランのような核物質取得、原子力施設破壊などがあり、これらに対する IAEA の努力を評価

- 4) テロの温床となっている貧困を始めとする様々な問題への対応が必要

そして議論の結果、次のような認識が得られた。

- 1) 今日においても、多国間軍備管理・軍縮規範がテロと闘う上で依然として効果的であること
- 2) 具体的な国際協力措置を決めた国連安全保障理事会決議 1373 を含む国連決議の十分な実施
- 3) 地域における対テロ情報や専門知識の共有と関連能力開発の必要性
- 4) 破綻国家への取り組み
- 5) 大量破壊兵器関連条約の強化、補完

こうした認識が得られたことは今後、テロ問題を公式の場で更に検討を進めるに当たって極めて有益と考える。

東京・渋谷の UN ハウス（国連大学ビル）の UN ギャラリーでは、2002年9月24日（火）から2003年1月10日（金）まで「世界百名山・国連切手」展を開催します。



国連郵政部では、国連の本部が設置されている米国、スイスおよびオーストリアの郵政当局との取り決めにより、記念行事や国際年に際して独自の切手を発行しています。2002年5月には、日本人写真家・白川義員氏の写真が採用された「国際山岳年」記念切手を発行しました【写真上は一部】。使用された写真は、これまで数々の山岳写真に取り組んできた白川氏の「世界百名山」より選ばれました。

UN ギャラリーでは、これまでに発行された国連切手とともに「世界百名山」シリーズの中から約30点の写真が展示されます。また、これまでに日本人によってデザインされた国連切手にもスポットを当ててご紹介します。

国連切手は通常、ニューヨーク、ジュネーブおよびウィーンの国連事務局にある国連郵便局からの投函にのみ使用が可能です。今回の展覧会開催に際し、「UN メールボックス」を UN ハウス1階に設置することになりました。ギャラリー内では国連切手の販売も行います。UN ギャラリーのオリジナル・ハガキに国連切手を貼付し UN メールボックスに投函すると、ニューヨークの国連郵政部に送られた後、ニューヨーク国連本部の消印が押され配達されます。

コレクターズ・アイテムとして人気の高い国連切手ですが、同時に、国連の活動を具現化した芸術作品でもあります。UN ギャラリーの展示を通して、これまで日本ではあまり紹介されることのなかった国連切手を身近に感じていただけることでしょう。



「世界百名山・国連切手」展

UNギャラリー（UNハウス1、2階）
2002年9月24日（火）～2003年1月10日（金）

土日、祝祭日、年末年始
および国連の休日は休館

午前10時～午後5時30分



発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 UNハウス8階

TEL: 03-5467-4451

FAX: 03-5467-4455

URL: <http://www.unic.or.jp>

E-mail: unic@untokyo.jp